

# 不定詞補部と動名詞補部の認知構造再考

濱 田 英 人

## 0. はじめに

不定詞補部と動名詞補部の性質の違いについては Kiparsky and Kiparsky (1971) などですでに指摘されており、(1)から(5)に示されるように、不定詞補部は「叙実性 (factuality)」をもたないのに対して、動名詞補部は「叙実性」をもつものとしてある程度一般化することができる。

- (1) a. I remember posting the letter.  
b. I remember to post the letter.
- (2) a. I tried closing the window.  
b. I tried to close the window.
- (3) a. I forgot locking the door.  
b. I forgot to lock the door.
- (4) a. I regret telling you that story.  
b. Max enjoyed swimming.  
c. I finished/stopped reading the book.  
d. They reported seeing the accident.
- (5) a. John expects to get a job, but I doubt that he will.  
b. I want to have a car of my own.

しかし、この一般化には(6)のような多くの反例が存在することもまた確かであり、(6a-f)では動名詞補部は未完了の出来事を表わし、(6g)の *manage* はい

わゆる含意動詞であり不定詞補部は実際に行われた出来事を表わしている。

- (6) a. Jane avoided talking to Harry.  
b. Would you mind my opening the window?  
c. I will appreciate hearing from you soon.  
d. John narrowly escaped being drowned.  
e. I just missed having an accident.  
f. We are considering going to Canada.  
g. John managed to get the loan.

小稿の目的は濱田（1999）で提案した不定詞補部／動名詞補部を含むそれぞれの節構造の認知モデルの妥当性を更に幾つかの具体的な現象から論じようとするものである。

第1節では不定詞と動名詞のそれぞれの概念構造について考察し、前者が「出来事をコト的に概念化した実体」であるのに対して、後者は「出来事をモノ的に概念化した実体」であることを述べる。第2節では第1節での schematic な特徴付けを基にして S+V(心的活動/心的反応を伴う行為)+to do/doing がそれぞれ異なる認知構造をもつものであることを主張する。そして、第3節では第2節で論じた prototype としての認知モデルが aspectual verbs の補部の選択にもある程度有効であることを示す。第4節はまとめである。

## 1. 不定詞と動名詞の概念構造

この節では、まず始めに不定詞と動名詞のそれぞれの概念がもつ性質の違いについて考えてみる。そこで次の (7a-b) と (8a-d) の容認可能性の違いに着目してみると、

- (7) a. We didn't give doing that a second thought.

- b. \*We didn't give to do that a second thought. (Declerck 1991: 466)
- (8) a. Jane once liked watching television and physical exercise both.  
b. \*Jane once liked watching television and to play volleyball both.  
c. \*Jane once liked to watch television and physical exercise both.  
d. \*Jane once liked physical exercise and to watch television both.

(小西 1980 : 872)

(7)のような二重目的語構文では間接目的語として動名詞は容認可能であるが、不定詞は容認されないことが分かる。また、(8a-d)は動名詞と名詞は等位接続することが可能であるが、不定詞と動名詞、あるいは不定詞と名詞は等位接続することが出来ないことを示している。一般に等位接続を許す項は意味的にも機能的にも等しいものでなくてはならないことはよく知られている。従って(7)や(8)の事実から動名詞と不定詞ではそれが表わす概念は明確に異なっていると考えることができる。そして、この2つの概念の違いは次の(9)で更に明らかになる。

- (9) a. To lie is wrong. (個別的・特定の行為)  
b. Lying is wrong. (一般的概念)

つまり、(9)において(9a)の *To lie* では非明示的ではあるが明確に行為の主体が想起されているのに対して(9b)の *Lying* は個別的・特定の行為ではなく、一般的概念 (activity in universal sense (Wierzbicka 1988)) を表しているものと解釈されるのである。従ってこれらの事実から、不定詞は「コト的に概念化された実体 (entity)」を表わし、動名詞は「モノ的に概念化された実体」を表わすと考えることができる。

そして、このような一般化が確かに不定詞と動名詞のもつ性質を捉えていることは次の言語事実からも明らかである。

- (10) a. Mary recommends buying the big tins.  
 b. Bill suggested reading the instructions first.  
 c. John advised consulting a lawyer.  
 d. Shafer (1967) reported finding a significant asymmetry in the electrical activity of the brain.

(10a-c) では動名詞補部によって記述されている事象は一般的な概念ではなく、明らかに個別的・特定の行為であり、この点では (9b) の動名詞の性質とは違っている。この違いは動名詞が主語や目的語といった文のどの要素を担っているかという問題として考えることができるが、しかし、ここで重要なことは動名詞補部の行為の主体は文主語ではないという事実である。つまり、動名詞は客体化された概念——文主語とは独立した概念——を表しているということであり、この動名詞が有する概念的自立性は名詞性を示す大きな特徴の一つであり、このことから動名詞が「モノ的概念」であると言うことができる。また、この点で一見反例となると思われる (10d) もある出来事を報じる (report) という行為がその記述対象を客体化して捉えるという心的過程を伴ってはじめて可能となるものであることを考えると、やはり動名詞補部は客体化された概念を表わしていると言える。

更に言えば、(11b) や (12b) に見られるように不定詞補部と動名詞補部ではそれが it-分裂文の焦点になることができるかどうかに関して違いが見られる。このことも前者が概念的に依存的な概念であるのに対して、後者が客体化された概念的自立性の高い実体であることを裏付けるものと考えられる。

- (11) a. I want to buy a new car.  
 b. \*It was to buy a new car that I wanted. (葛西 1998 : 116)
- (12) a. John enjoyed playing the piano.  
 b. It was playing the piano that John enjoyed. (Wierzbicka 1988: 84)

つまり、(11a) の *to buy a new car* は概念的に独立した概念ではなく、むしろ *want to buy a new car* でいわば1つの意味的な単位を成しているため、不定詞補部のみを焦点化することが出来ないのに対して、(12a) の *playing the piano* は客体化された概念として認識されているため、動名詞補部のみを焦点化することが可能であると考えられる<sup>1</sup>。

また、この概念的依存性/自立性ということに関して更に言えば、

- (13) a. John is believed to be honest.  
b. \*John is tragic being found guilty.

(13a) では *John to be honest* は不連続構成素をなせるのに対して (13b) では *John being found guilty* は不連続構成素をなせない。これは不定詞が「コト的」であり、概念的に依存的な概念を表しているために、*John* が行為の主体としてその概念を完結させる実体であるという認識作用が働くのに対して、動名詞は「モノ的」で、概念的に自立性が高く完結性をもつために、*John* をその概念を完結させるのに不可欠な要素として認識でき難いからであると考えられる。

そこで以上のような考察から、不定詞と動名詞を(14)のように特徴付け、それぞれを Figure 1(a-b) のように図示することができる。

- (14) (a) 不定詞は出来事をコト的 (eventive) に概念化した実体 (entity) であり、概念的に依存的な概念を表す。  
(b) 動名詞は出来事をモノ的 (thing-like) に概念化した実体であり、客体化された概念を表しており、概念的に自立性が高い。

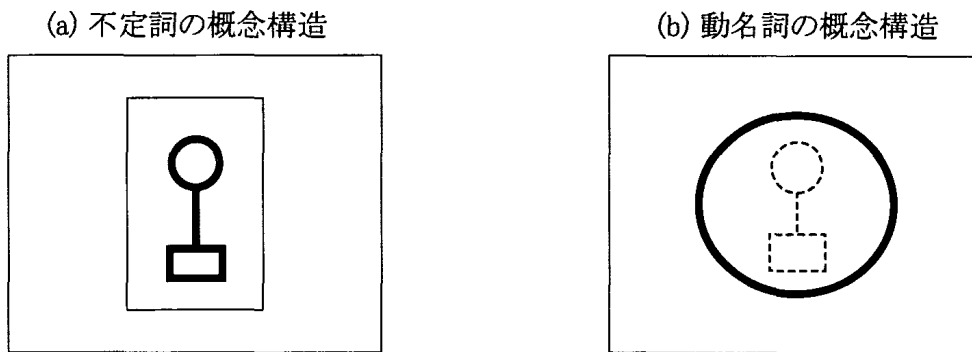


Figure 1

ここで、それぞれの図の外側の四角は出来事の起こる場面 (setting) を表わしており、Figure 1(a) では内側の四角の中の太線の小さな円は不定詞によって指示される行為の主体を表わし、その円と太線の小さな四角とそれを結ぶ直線は process を表わし、内側の四角全体が不定詞の概念構造を表わしている。そして、ここで重要なことは不定詞は概念的に依存的な概念であり、特定の行為の主体が elaborate されることで概念が完結するということである。それに対して、Figure 1(b) の動名詞の場合は process の概念を基礎としてはいるが、それをモノ的に概念化したものであり、それだけ概念的自立性が高く、このことを行為の概念を点線で、また、それがモノ的に概念化されていることを太線の円で示している。そして、動名詞をこのように特徴付けることが妥当である理由の一つは、モノ的に概念化された実体という点で同一範疇をなす「名詞的動名詞」と「動詞的動名詞」の統語的振る舞いの違いを、点線によって示される基底概念としての process がどの程度活性化したものとして認識されているかという度合の問題に帰することが可能となることである。つまり、(15a-b) の違いは基底概念の活性化の度合いの問題であり、(15b) では基底概念が inactive であるため、動名詞と他の実体との intrinsic relation を示すために *of* の介在が必要となるとすることで、(15a-b) の同一範疇内での連続性を自然に説明することができるのである。

(15) a. Zelda's signing the contract

b. Zelda's signing of the contract

以下では、このことを踏まえて、不定詞と動名詞の表わす概念の違いがS+V+to do とS+V+doingのそれぞれの節構造にどのように関与しているのかを考察していくことにする。

## 2. S+V(心的活動や心的反応を伴う行為)+to do/doingの認知構造

この節では、第1節で示した不定詞と動名詞の概念構造を基にそれぞれの補部を含めた節構造で、特に主節の動詞が心的活動あるいは心的反応を伴う行為である場合の節構造がどのような認知構造をもつものであるかを述べる。そこで、まず始めに典型的な例として(16)や(17)の文を観察してみる。

- (16) a. John claims to be the owner of the land.  
b. Mary wants to have chicken for dinner.
- (17) a. I will appreciate hearing from you soon.  
b. Max enjoyed swimming.

ここで、(16)の *claim, want* は不定詞のみを補部にする動詞であり、(17)の *appreciate, enjoy* は動名詞のみを補部にする動詞である。そこでこの2つのタイプの構造の主語にまず着目してみると、(16)の主語の意味的役割は「心的行為の主体 (agent)」であるのに対して(17)の主語はむしろ「経験者 (experiencer)」であることが分かる。つまり、(15)では文主語である *John* や *Mary* が不定詞によって表わされる出来事を意図的に引き起こそうとしているのであり、その出来事に対して *claim, want* という能動的な態度表明をしているのである。しかし、(17)はこれと同じようには解釈できない。むしろ、*hearing from you* や *swimming* という事象がいわば刺激 (stimulus) となり、それが文主語に *appreciate* あるいは *enjoy* という感情を引き起こさせていると考えるほうが自然である。また、この

ような動詞の性質と主語の意味的役割の側面から次の(19)に見られる *mind* と *care* の振る舞いの違いも説明がつく。

- (18) a. Do you mind if I smoke?  $\rightleftharpoons$  Do you care if I smoke?  
b. He doesn't mind what they say.  $\rightleftharpoons$  He doesn't care what they say.

(18 a-b)では一見 *mind* と *care* は同じ様な振る舞いをするように見える。しかし、次の(19)に示されるように *mind* は動名詞補部と共起するが、*care* はそうではない。

- (19) a. Would you mind my opening the window?  
b. \*Do you care my smoking?

これは、(19a) では *mind* は “be troubled by, feel objection to” (OALD) という意味からその主語の意味的役割は「経験者」であり、*my opening the window* という事象が文主語の *you* に *mind* という気持ちを引き起こさせるかどうかを問うているのに対して、(19b) では *care* は “be willing or desirous” (OALD) という意味であり、主語の意味的役割が「心的行為の主体」であり、(16)の *claim* や *want* と同様の意味構造をもつためであると考えられる。そして、この理由のために *care* は実際に(20)のように不定詞補部と共起すると考えられる。

- (20) a. Would you care to lock the door for me?  
b. I don't care to have coffee after breakfast.

そして、更に付け加えると、(21)や(22)に示される言語事実は不定詞補部と動名詞補部の選択に関するここでの分析の視点がある程度妥当性を有することを示している。



- (21) a. I'm aching to travel.  
b. John desired to marry Mary.  
c. I'm longing to hear from you.  
d. Mary chose to have me stay.  
e. We concluded to wait for fair weather.  
f. John determined to prove his friend's innocence.  
g. We resolved to make an early start.  
h. John decided to build a new house.  
i. John agreed to come with us.  
j. John consented to help her.  
k. John assented to go there.  
l. Bill aims to improve his invention.  
m. Bill tends to boast.  
n. To our surprise, John dared to repeat his statement.  
o. John failed to follow our advice.  
p. The customer demanded to know why his bill was so high.  
q. Mary proposed to catch the early train.
- (22) a. Mary dislike plucking chickens.  
b. John doubts being able to finish it in time.  
c. Bill resented everyone's being very quiet.  
d. I can't help thinking he is still alive.  
e. She forgave my breaking her mirror.  
g. John detested being alone.  
h. I could not resist laughing.  
i. I cannot endure seeing her treated unkindly.  
j. He cannot bear sleeping in a hard bed.

(21)における動詞のように「～することを望む」「～しようとする」「～に同意



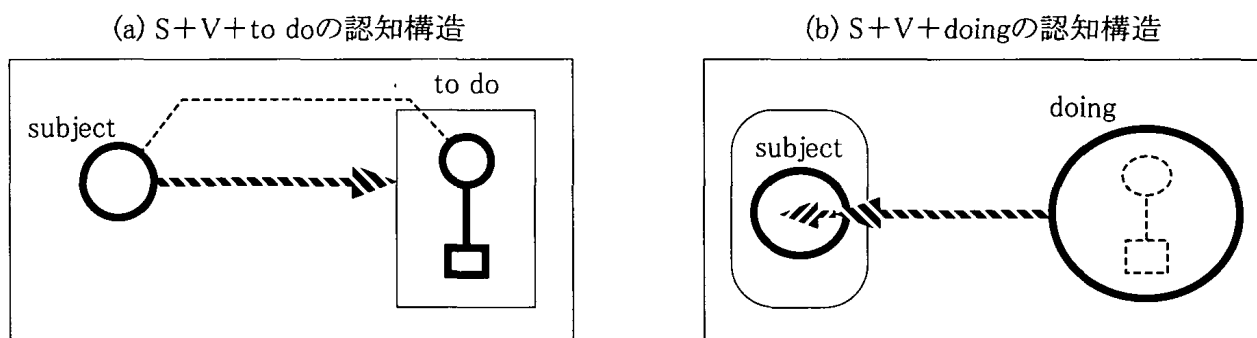


Figure 2

ここで、この Figure 2 のそれぞれの認知モデルは先に(14)で述べた不定詞と動名詞の schematic な特徴付けと矛盾するものではない。というのは動名詞が客体化された概念であるということはそれが主語の認知領域 (dominion) の外にある概念であるということであり、そうであるからこそ、その概念が主語に影響を与える実体として、あるいは、主語の認知領域にやって来るものとして認識され得ると言えるからである。

では次に、ここでの主張の妥当性を示すために、不定詞補部と動名詞補部の両方を取る動詞の場合について、その補部の選択に Figure 2 で示した認知構造の違いが関与していると言えるかどうかを見てみる。そこで、代表的な動詞である like, hate, regret, fear を COBUILD で調べてみると確かに我々がある事象と心的接触をもつ場合、2つの心的態度があると言える。

- (24) (a) **like**: 1. If you like something or someone, you think they are interesting, enjoyable, or attractive.  
 2. If you say that you like to do something or that you like something to be done, you mean that you prefer to do it or prefer it to be done...  
 cf. **dislike**: If you dislike someone or something, you consider them to be unpleasant.
- (b) **hate**: 1. If you say that you hate something, you mean that you

find it very unpleasant.

2. You can use **hate** in expressions such as **I hate to say it** or **I hate to tell you** when you want to express regret about what you are about to say, because you think it is unpleasant or should not be the case.
3. You can use **hate** in expressions like **I'd hate to think** when you hope that something is not true or that something will not happen.

(c) **regret**: 1. If you regret something that you have done, you wish that you had not done it. Regret is a feeling of sadness or disappointment, which is caused by something that has happened or something that you have done or not done.

2. You can say that you regret something as a polite way of saying that you are sorry about it. You use expressions such as **I regret to say** or **I regret to inform you** to show that you are sorry about something.

(d) **fear**: 1. If you fear something or someone, you are frightened because you think they will harm you.

2. If you fear to do something, you are afraid to do it or you do not wish to do. (下線は筆者)

つまり、(24)のそれぞれについて、1. の意味記述は something or someone に対するものであり、2. や 3. の意味記述は出来事に対するものであるから、(14)で示したように動名詞が「モノ的概念」、不定詞が「コト的概念」とすると、1. の意味は動名詞補部の場合、2. の意味は不定詞補部の場合に当てはまる。すると、ここで注目してよいことは1. の場合には下線で示されているように形容詞あるいは受動表現で意味記述がなされているということであり、このことから文主語が passive participant であることが分かる。それに対して、2. の

意味記述では *prefer to*, *wish to*, *want to* などを用いた能動表現となっており、文主語が active participant であることを示している。従って、このことから感情の持ち方には「ある事柄に対して文主語が能動的に発動している感情」と「ある事柄によって誘発され、自然に文主語の心の中に生じる感情」という2つの心的態度があることが分かる。そして、(25)の like to do と like doing の違いを支えているのはまさにこの違いであり、その証拠に (26b) が容認されにくいのは would という意志性 (volitionality) を表す要素が自然に誘発される感情を示す動名詞と共起しており、「心的態度の一貫性」(葛西 1998) を欠いているためであると考えることができる。また、このことは prefer to do/doing にもあてはまり、would prefer to do/\*doing という対比も同様に説明することができる。

- (25) a. I like to go for a walk on Sundays.  
b. I like sitting in the garden when it is fine.
- (26) a. I would like to go to that play tonight.  
b. \*I would like going to that play tonight.

更に、例を挙げると、

- (27) a. I hate speaking ill of others.  
b. I hate to break the news to her.
- (28) a. John regrets telling you that story.  
b. We regret to inform you that you are to be dismissed next week.
- (29) a. Bill feared being let alone.  
b. She feared to disturb his thought.

(27a) では *speaking ill of others* という動名詞補部は特定の行為者を想起した個別的で特定の行為ではなく、むしろ、一般的な意味での行為そのものを表

しており、この場合、動名詞補部は文主語に *hate* という感情を起こさせるものとして捉えることができる。それに対して、(27b) は不定詞補部によって示される個別的な行為に対して文主語が能動的に *hate* という感情を表明していると考えることができる。このことは(28)でも同様であり、(28a) では *telling you that story* という事柄が *John* に *regret* という感情を引き起こさせているのであり、(28b) は一種の “polite expression” であるが、“politeness” ということとそれ自体が意志性を有するものであるとすると、それが不定詞補部を要求することはここでの主張を支持するものである。更に、(29a) は「独りになる」という事態が *Bill* に *fear* という感情を引き起こさせたのであり、(29b) では *fear to do* は「結果を恐れて to do したくない」という意味であり、これらはすべて Figure 2(a-b) の認知モデルからその補部を正しく予測することができると言える。

また、この種の議論でよく引用される (30a-b) のような *remember to do/doing* の対比もここでの議論を支持するものと考えられる。

- (30) a. I remember locking the door.  
 b. I remember to lock the door.
- (31) a. If you remember people or events from the past, you still have an idea of them in your mind and you are able to think about them.  
 b. If you remember to do something, you do it when you intend to.

(COBUILD)

というのは、(31)から分かるように (30a) の *remember doing* が「補文事象が文主語の記憶に残っている」という意味であるということは、文主語が補文事象を経験し、それによってその経験が主語の記憶に組み込まれ、留まっているということであり、認知モデルとしてはやはり Figure 2(b) に一致しており、それに対して、(30b) は「意図的に補文事象を実行することを忘れないでいる」という意味であり、Figure 2(a) の認知構造をもつと考えられるからである。

また、ここでの分析は (32a-d) の *imagine*, *fancy*, *visualize*, *envisage* のように「補部によって表される事象が文主語の心に浮かぶ」という意味内容をもつ動詞の補部も正しく予測することができる。というのはこれらの動詞は Figure 3 のように補文事象が文主語の *dominion* に現れるあるいはやって来るという点で共通しており、このような認識作用がその補部に動名詞を要求していると考えられるからである。この点で、(32e) の *consider* も「熟考、考察の結果ある種の意見や見解をもつ」（小西 1980；293）という意味から補文事象が文主語の *dominion* に現れると分析することができ、また、(32f) の *anticipate* も「出来事の結果についてあらかじめ知識などをもつことを含意する」（小西 1980：521）ことから何か原因となる事があり、その結果補文事象が文主語の *dominion* に現れるという認識作用が働くために動名詞補部を取ると考えられる。

- (32) a. Can you imagine her doing such a thing?  
 b. I can't fancy your doing it.  
 c. Can you visualize living on the moon?  
 d. I can't envisage the plan's working.  
 e. We are considering going to Canada.  
 f. Jane is anticipating receiving a gift from her uncle.

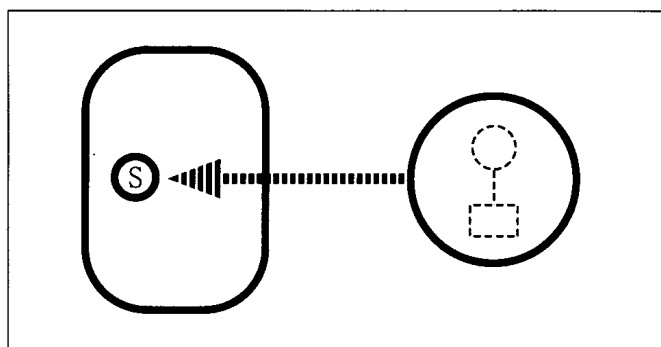


Figure 3

更に、このように見てくると心的活動ではなく、心的反応を伴う具体的な行為を表わす動詞のいくつかについても、同様の説明が可能であるように思われる。

- (33) a. I avoided meeting John. (avoid : to escape, evade (things coming towards one))  
 b. I refused to meet John. (refuse : to reject a thing or person in making a choice or selection)  
 (OED)

(33a) では *avoid* はその意味から「補部によって表わされる事象が文主語にやって来るという事態になるため、それを避ける」ということであり、Figure 2(b) の認知モデルとして認識されるために動名詞補部を取り、それに対して、(33b) の *refuse* は「文主語が可能な選択として補文事象を拒む」という意味内容をもつために Figure 2(a) の認知構造をもつものとして認識され、不定詞補部を取るのである。また、このことは *deny* のような動詞を考えてみることで更に明確になる。つまり、(34)では文主語は補部事象に対して主動詞によって表されている行為を積極的に行っているのではなく、むしろ、何かある原因が刺激となり、それが主語に主動詞によって表される行為を引き起こさせていると考えるのが妥当である。つまり、overall scope には存在するが immediate scope 内にはないために言語化されていない使役主体 (causer) あるいは刺激 (stimulus) が主語にある行為をさせたと分析することが可能である。

- (34) a. John denied knowing anything about their plan.  
 (John denied any knowledge about their plan.)  
 b. John denied having stolen the money.

従って、このことから *avoid*, *deny* という行為そのものは文主語の意図的行



為と言えるが、それはあくまでその補文事象がいわば文主語の *dominion* にもたらされた結果として起こった文主語の反応であり、Figure 4 のような認知モデルをもつ構造なのである。

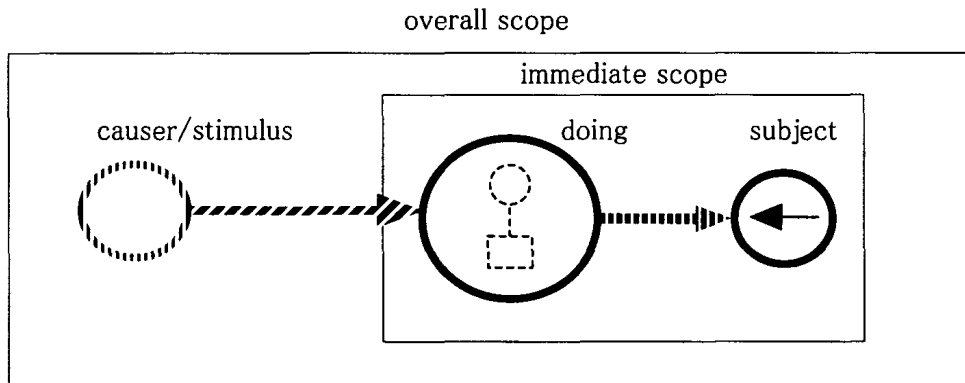


Figure 4

この図では、破線で書かれた円と矢印は言語化されてはいないが補文事象をもたらした「使役主体」あるいは「刺激」を表わしており、それによって補文事象が文主語の *dominion* あるいは *immediate scope* に提示されていることを表わしている。また、文主語の中の矢印は *avoid*, *deny* など主節の動詞によって言語化されている文主語の反応を表したものであるが、ここで矢印が補文事象の方向に向けられているのは、文主語が完全な経験者ではなく、言語化されていない使役主体や刺激に誘発された行為ではあるが、意志を伴った行為の主体であることを示すためである。そして、文主語がこのような性質をもっているとしても、ここで重要なことは、補文事象が主語の *dominion* あるいは *immediate scope* にもたらされるということであり、この Figure 4 は認知構造としてはやはり Figure 2(b) に類似しており、このことが補部に動名詞を要求しているものと考えることができる。

また、この点で(35)の *admit*, *confess*, *acknowledge* もそれらが有する認知構造のために動名詞補部を取ると考えることができる。

- (35) a. Bob admitted seeing/having seen John.  
 b. Mary confessed having stolen the purse.  
 c. We acknowledged having been defeated.

つまり、*admit* は「否定していたことを外からの圧力によって認める」ことを含意し、*acknowledge* は「秘密にしておきたいことをいやいや認める」という意味内容をもつ（小西 1980：16）ため、Figure 4 の認知構造をもつと考えられる。従って、このことから、*avoid, refuse, deny, admit, confess, acknowledge* など何らかの心的反応を伴う具体的な行為を表わす動詞の場合もその補部の選択に Figure 2 (a-b) の認知モデルが関与していると言うことができる。

### 3. Aspectual verbs

第1節では不定詞と動名詞の概念構造の違いについて述べ、第2節では心的活動を表わす動詞を中心に S+V+to do/doing の認知構造について議論し、それが何らかの心的反応を伴う具体的な行為を表わす動詞にも当てはまることを見た。そこで、この節では第2節で提案した Figure 2(a-b) の認知モデルが aspectual verbs の分析にもある程度有効であることを述べたい。

そこで、まず始めに、局面を表わす表現をどのようなものとして捉えるかに関してであるが、このことについて井筒（1999）は出来事の「始まり」と「終わり」という局面を表す表現について考察し、「始まり」とは、「process が主語の dominion または immediate scope の中に現れる」ことであり、「終わり」とは「process が主語の dominion または immediate scope から消失する」ことであると分析している。そこでこの分析に基づき、「始まり」を表す局面表現の補部が不定詞で言語化される場合と動名詞で言語化される場合について、それが概念主体である話者のどのような認識の違いを反映しているのかを考えてみると、これまでの考察から、次のようなモデルとして提示することができるように思われる<sup>2</sup>。

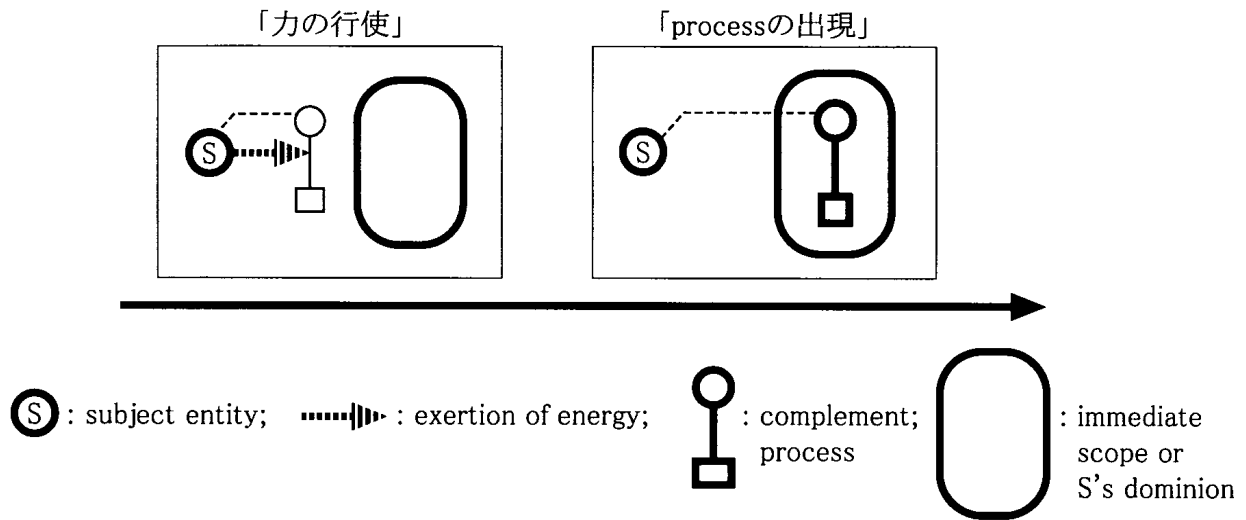


Figure 5

Figure 5 では S と書かれた円は主語の指示対象、その円から出ている矢印は力の行使、円と四角とそれを結ぶ直線は補部によって指示される process、縦の楕円は immediate scope あるいは主語の dominion、また、2つの大きな四角の下の矢印は概念化に要する時の流れをそれぞれ表わしている。そして、出来事の「始まり」を表わしたこの Figure 5 から、「始まり」という概念が主語が抽象的なレベルで力を行使し、補部によって指示される process を主語の dominion あるいは immediate scope に出現させることであるとすると、「力の行使」と「process の出現」という連続体のどちらをより salient であると認識するかで言語化される形式が異なるのではないかという仮説を立てることができる。つまり、補部が不定詞で言語化されている場合には抽象的なレベルでの力の行使が salient として認識されているからであり、動名詞で言語化されている場合には力の行使の結果として、process が主語の dominion あるいは immediate scope の中に現れたという結果が salient として認識されていると仮定することができる。そして、この分析は begin to do/doing, start to do/doing の意味的な違いからも支持される。

(36) a. John started to play the piano.

b. John started playing the piano.

(37) a. Mary began to hit John.

b. Mary began hitting John.

つまり、(36a) では「ジョンはピアノを弾こうとした」というように弾く直前の段階が意味されており、これは力の行使が salient として認識されているため、このように解釈されると考えられる。それに対して (36b) はまさに演奏の開始を意味し、このような解釈は力の行使の結果としての process の出現が salient であるためであると言える。そして、このことは当然(37)の *begin* にも当てはまる。そして、このように考えると、aspectual verbs の補部の選択も、やはり先に Figure 2(a-b) で示した認知モデルに対応するものであると言うことができるように思われる。というのは、不定詞補部の場合には、文主語が不定詞によって指示される process を主語の dominion あるいは immediate scope に出現させようと力を行使するという部分が salient であるとする、それはまさに Figure 2(a) の認知構造をもつものとして分析することができ、また、動名詞補部の場合には、文主語の dominion あるいは immediate scope の中に動名詞によって指示される process が出現したという結果が salient であるわけであるから、それまではなかった process が主語の dominion あるいは immediate scope に入って来たという認識作用が働いていると考えることができ、従ってそこには Figure 2(b) のような認識過程が関与していると言うことができるからである<sup>3</sup>。

では次に、「終わり」を表す aspectual verbs の補部はどのように分析されるのだろうか。ここでまず注目してよいことは、英語の場合には(38)のように *cease*, *finish*, *stop*, *complete*, *quit*, *discontinue* を例にとると *cease* が不定詞と動名詞の両方を補部にとるという以外は動名詞補部とのみ共起可能であるという事実である。

(38) a. I finished/stopped reading the book.

- b. He completed repairing a watch.
- c. He quit smoking.
- d. He discontinued taking a course of French.
- e. Lacy ceased to cry when she heard her parents come in the door.

そこで、改めて「終わり」という局面を表す aspectual verbs がなぜ動名詞をその補部として要求するのかを考えてみると、採り得る仮説として、それは概念主体である話者が記述対象である出来事をどの視点から捉えているかという vantage point の問題として考えることができるように思われる。つまり、英語ではある出来事の「終わり」を指示する場合の unmarked な vantage point は Figure 6 に示されるようにその終わりの局面にあるという仮定である。

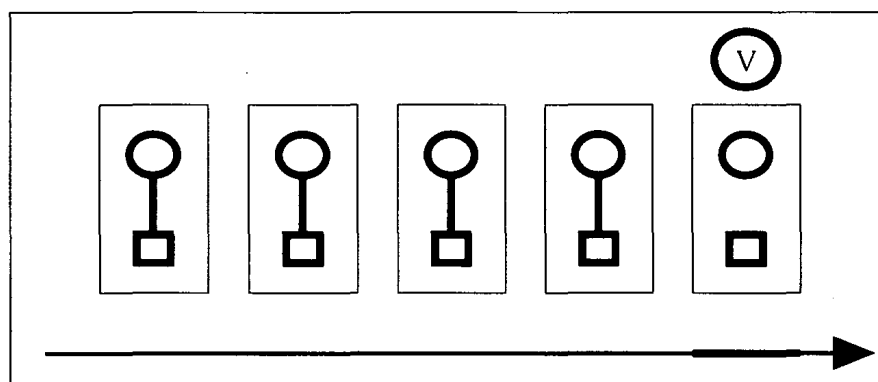


Figure 6

そして、この仮定が妥当であるとする、ある出来事が「終わる」という事態は Figure 6 の vantage point から見れば「来るもの」として認識されるということが出来る。このことは「終わる」、「停止する」ということが come to an end, come to a halt というように come として言語化されることからもある程度支持が得られる。従って、動名詞補部を取る aspectual verbs の節構造では、Figure 7 のように文主語が primary figure として認識され、それが動名詞補部の構成要素の行為の主体と一致関係にあり、また、vantage point が process の

消失の点にあることから、process の消失が文主語の dominion に来るものとして認識されると考えられる。従って、この場合も Figure 8 の認知構造からやはり先に第 2 節の Figure 2(b) で示した認知モデルと類似性をもつために、「終わり」という局面を表す aspectual verbs が動名詞と共起すると考えられる。

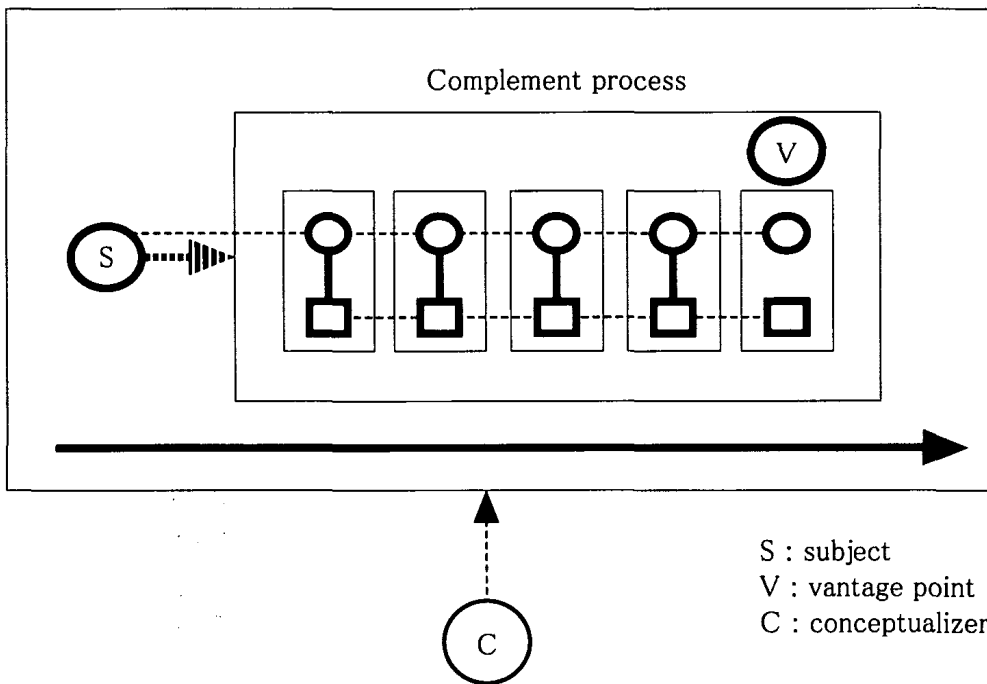


Figure 7

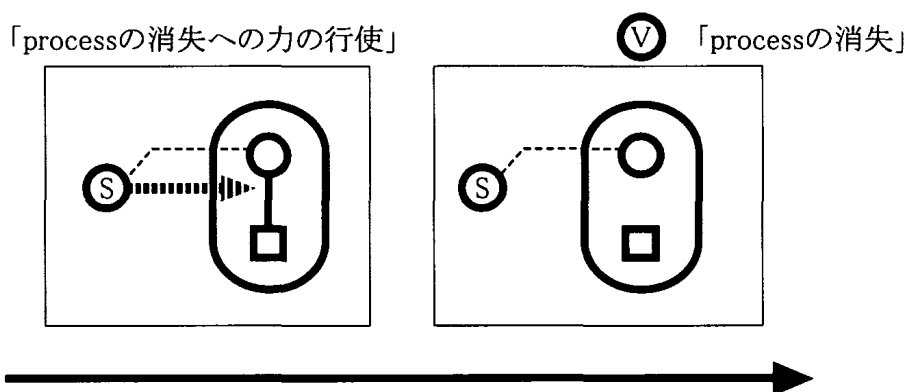


Figure 8

またここで、cease が不定詞補部とも共起することについて説明を付け加え

ると、これは *cease to do* が「次第に～しなくなる」という概念内容をもつことと関係があると言える。つまり、*vantage point* が Figure 8 のように *process* の消失の地点にあるのではなく、主語の位置から見た *Complement process* の消失過程全体が視界の中にあるのであり、従って、Figure 8 の「*process* の消失への力の行使」も概念化されるために Figure 2(a) の認知モデルに類似した認知構造をもつものとして認識され、その結果不定詞補部を取ると考えられる。

しかし、ここで *aspectual verbs* とその補部の関係に関しては、見逃してはならない重要なことがある。それは *aspectual verbs* の補部は客体化された概念ではあり得ないということであり、このことは一見先に第 1 節で述べた動名詞の特徴付けと矛盾するように思われるということである。しかし、この問題に関しては次のように考えることができる。つまり、「動作の局面を表す」という *aspectual verbs* のもつ性質それ自体にその答えがあるのであり、*begin, start, finish, continue* などの *aspectual verbs* が文法化 (*grammaticalization*) されて補部によって表わされる行為の局面を指示する機能のみを有するとすると、*enjoy* や *appreciate* などが動名詞補部を取っている場合とは異なり、その補部のみを客体化して捉えること自体が不可能なのであり、このことは(39)のように *aspectual verbs* の補部が *it*-分裂文の焦点になれないことから明かである。

- (39) a. John started snoring. /\*It was snoring that John started.  
 b. Mary kept laughing. /? It was laughing that Mary kept.  
 c. John stopped working. /? It was working that John stopped.
- (40) a. John enjoyed/kept playing the piano.  
 b. It was playing the piano that John enjoyed/\*kept.

(Wierzbicka 1988: 84)

そして、このような特殊性はあるものの、ここで重要なことは、*aspectual verbs* の補部の選択が Figure 2(a-b)で示した認知モデルによって動機付けられているということであり、このことから、小稿で主張してきた分析はある程度妥

当性を有するものと考えることができる。

#### 4. まとめ

小稿では、まず始めに不定詞と動名詞の概念構造について考察し、前者が出来事をコト的に概念化した実体であり、概念的に依存的な概念であるのに対して、後者は出来事をモノ的に概念化した実体であり、客体化された概念を表わし、概念的に自立的であることを主張した。そしてその上で、動詞が心的活動を表わす場合や心的反応を伴う具体的な行為を表わしている場合には、文主語と補文事象との間の心的接触 (mental contact) における抽象的なレベルでの非対称的な energetic interaction の方向性の違いが補部の選択に深く関与していることを論じた。また、aspectual verbs とその補部の関係の場合には enjoy などそれ自体の意味内容をもつ動詞とは違って、aspectual verbs が文法化 (grammaticalization) されて補部によって表わされる行為の局面のみを示す機能を有しているため、その補部のみを客体化して認識することは不可能であるという特殊性を有するものの、やはりその補部の選択に同じ原理が作用していることを主張した。

本稿では議論の都合上、S+V+to do/doing という構造に議論を限定してきた。従って、不定詞／動名詞を伴う他の構造の分析がなければ完全なものとは言えないことは明らかであるが、小稿で提案した認知モデルが不定詞補部と動名詞補部の選択をある程度原理的に予測できるという点で妥当性を有するものと考えられる。ここで残された問題については今後の課題として更に考察し、改めて議論することとしたい。

#### 注

1. 葛西 (1998: 第2章、2-7) では分裂文について詳細に議論し、その性質が明らかにされており、「\*It was to buy a new car that I wanted. で to buy が目的語でありながら、焦点になれないのは \*To buy~was wanted. という受動態が許容されないことでもわかるように、この to buy は目的語とし



ての性質がきわめてよわいからであろう。」と述べられている。従って、このことからここでの分析の支持が得られる。

2. この Figure 5 は井筒（1999）の Figure 3 を基にしたものである。
3. また、このような認識作用の違い、つまり、文主語の力の行使が salient であるのか、その結果としての process の文主語の dominion あるいは immediate scope への出現が salient であるのかという違いが Figure 2(a-b) という認知構造を動機付け、その結果、補部が不定詞あるいは動名詞として具現されるとすると、逆に、その具現形の違いから意味的差異を説明することも可能なはずである。そして、実際、このことは Haiman(1983)や Givón(1991)の(i)や(ii)の原理から述べ直すことができる。

(i) The linguistic distance between expressions corresponds to the conceptual distance between them. (Haiman 1983 : 782)

(ii) The proximity principle:

Entities that are closer together functionally, conceptually, or cognitively will be placed closer together at the code level, i. e. temporally or spatially. (Givón 1991 : 89)

つまり、「概念間の距離が表現間の距離に比例する」という Haiman の主張や「機能的、認知的に密接な関係にある実体は互いに近くに置かれる」という Givón の主張から、「始まり」を表わす start, begin などの aspectual verbs がその補部に不定詞を取る場合と、動名詞を取る場合とでの意味的差異をより大きな原理に従ったものとして自然に説明することができると考えられる。つまり、不定詞補部の場合には aspectual verbs と補部の間に to が介在し、その分両者の間の概念的距離が広がるのに対して、動名詞補部は aspectual verbs と直接的に結び付いており、この違いが不定詞補部では「動作の始まりの直前」を意味し、動名詞補部の場合には「直接的な始まり」を意味する結果として認識されると考えられる。

References

- 有村兼彬・天野政千代. 1987. 『英語の文法』 英語学入門講座 第8巻 英潮社  
新社.
- Declerck, R. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*.  
Tokyo: Kaitakusha.
- Dixon, Robert M.W. 1984. "The semantic basis of syntactic properties."  
*Berkeley Linguistics Society, proceedings* 10 : 583-595.
- Givón, Talmy. 1991. "Isomorphism in the grammatical code: cognitive and  
biological consideration." *Studies in Language* 15, 85-114.
- 井筒勝信. 1999. 「局面の概念化様式」 『文化と言語』 札幌大学外国語学部紀要、  
第51号.
- 伊藤梨恵. 1999. 「不定詞補部と動名詞補部の統語的振る舞いと意味的差異につ  
いて」 *Studies in Linguistic Semantics*, Sapporo University Linguistic  
Circle.
- Haiman, John. 1983. "Iconic and economic motivation." *Language* 59,  
781-819.
- 濱田英人. 1999. 「不定詞補部と動名詞補部の認知構造について」 『文化と言語』  
札幌大学外国語学部紀要、第50号.
- Hayase Naoko. 1996. "On the Interaction of Possessive Constructions  
with Two Types of Abstract Nominalization: A Cognitive Viewpoint."  
*English Linguistics*, 248-276.
- Hudson, R. A. 1971. *English Complex Sentences An Introduction to Sys-  
temic Grammar*. Amsterdam • London: North-Holland Publishing Com-  
pany.
- 葛西清蔵. 1997. 『英語学演義』 札幌：共同文化社.  
\_\_\_\_\_ 1998. 『心的態度の英語学』 東京：リーベル出版.
- 柏野健次. 1993. 『意味論から見た語法』 東京：研究社.
- Kiparsky, Paul, and Carol Kiparsky. 1971. "Fact." In Danny D. Steinberg

- and Leon A. Jakobovits, eds., *Semantics*, 345-367. Cambridge: Cambridge University Press.
- 小西友七. 1980. 『英語基本動詞辞典』 東京：研究社.
- Langacker, Ronald W. 1990. *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- \_\_\_\_\_ 1991. *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol.2. Stanford: Stanford University Press.
- Marianne Celce-Murcia and Diane Larsen-Freeman. 1983. *The Grammar Book An ESL/EFL Teacher's Course*. Newbury House Publishers, Inc.
- Quirk, R. et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of English Language*. London: Longman.
- Ross, John R. 1973. Nouniness. O. Fujimura ed. *Three Dimensions of Linguistic Theory*. Tokyo: TEC Company, Ltd.. (安井稔編集. 1975. 『海外英語学論叢』 東京：英潮社)
- Wierzbicka, Anna. 1988. *The Semantics of Grammar*. Studies in Language Companion Series, 18. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- 安井 稔. 1974. 『英語学の世界』 東京：大修館.
- 吉田正治. 1995. 『英語教師のための英文法』 東京：研究社.
- Collins COBUILD English Dictionary*.
- Oxford Advanced Learner's Dictionary*.
- Oxford English Dictionary*.